

冬は薪の香りとともに

はやく降りてくる冬の夜の帳の中に漂う燃えた薪の香りは、いずこかの濃密な部屋の暖炉の心地よい暖かさを私に思い浮かべさせます。そんな冬は、サンクス・ギビングとクリスマスの時期であり、まるで人混みの急増中の温度の上昇に合わせるように気温が下がってきます。

サンクス・ギビング・デーと呼ばれる11月の第4木曜日は、400年ほど前の出来事に由来していると言われていています。当時ヨーロッパからアメリカ大陸に来た「侵入者」が、自分達の土地を奪われ続けていた原住民の怒りを静めるように、平和のための食事に原住民を招待したことが始まりであるとされています。しかしながら、時を経た現在では、ほぼ世の中から消されてしまった原住民とは関係なく、一般的な感謝を表現するための、または大食を満たすための祝日になってしまいました。



サンクス・ギビング・デーの翌日は、ブラック・フライデーです。通常は昼間の店内を波動的に動く人混みが、珍しくもこの日は、午前3時・4時といった真っ暗闇の早朝から、寒空をものともせず、開店前の店のドアの外で、着込んだコートの襟元をしっかりと締めて静かにうごめいています。それはブラック・フライデー用にセットされた異常とも言えるディスカウントを得るための行為ですが、漠然とした語源のある「黒い金曜日」と名づけられたこととあいまって、何かの邪な予言行為のようでもあります。

ブラック・フライデーが終わると、まだクリスマスまでは一カ月もあるのに、街中はもうクリスマスだと浮かれはじめます。例えば、スタバでもマクドでも絶え間なく、ある意味で残酷なクリスマス音楽がスピーカーから漏れてきて、今年のクリスマスやお正月をどうやって過ごすかについての不安や楽しみ及び家族や恋人に対する気持ちをその熟知した音楽とともに店内の空間に漂わせます。街並みはクリスマスのデコレーションで飾られて、人々に暖かい気持ちを与えてくれます。家々の暖炉から出てくる薪の香りが、通りを歩く人々の心を刺激します。

多くの家庭では、クリスマスツリーを飾りつける習慣は、今でも大事な儀式のように守られています。私の幼年時のクリスマスでは、ツリーに飾るオーナメントの量が驚くほど多かったことを覚えています。母親が大切にしている無数のオーナメントを、父親と私が屋根裏部屋から一階まで運び出すのです。いつかの大切な歴史を象徴するそれぞれのオーナメントをそれぞれの箱から取り出して母親に渡すと、彼女の手ぬくもりに無意識に潜む芸術的才能によってそれぞれが位置決め

されツリーに飾り付けられたオーナメントを延々と眺め続けていました。

日本では、クリスマスの日には恋人たちが一緒に過ごし、お正月には家族と一緒に過ごすと聞いていますが、アメリカの習慣は反対になっています。クリスマスイブの夜にプレゼントをツリーの周りに置き、いっぱいになったストッキングを暖炉の前に飾って、その夜に一つだけのプレゼントを開けてもいいかと興奮する子供が親を訪ねて、暖炉の前で集まった家族が「家族」というものの強さと暖炉の火とを感じさせる重ねた暖かさにふけています。一方、昔の人が決めた時間を制御するための数え方による「年」の最後と最初を待つニューイヤーズイブには、恋人たちが一緒にパーティーに行ったり食事に行ったりします。もちろん、恋人と呼ばれる人が居ない者もパーティーに行って友達と遊び、未知知らぬその「誰か」が現れるのを願いながら真夜中を待ちます。

ヤドリギの習慣は不思議な習慣です。古代のケルト人によると動物の不妊あるいは毒を



治療するような効能を持つらしいです。アイスランドでもスカンジナビアでも色んな神話によってヤドリギの力が語られています。現代では、薬のような力を持つというよりは、恋愛パワーを持つと考えられているようです。恋人でなくても、偶然に二人が天井からぶら下がっているヤドリギの小枝の下で会えば、ルールとして接吻をしないといけません。これで確かに、喜ぶ人もいるでしょうが、困る人もいるでしょう。

渋滞や悪天候に乱される交通のうねりを超えることのできる人たちが、ようやく行き先にたどり着いてから、待ってくれる家族と恋人に会って、ホリデー・パーティーに出席します。ワシントンDCの日米協会が日本式の“忘年会”を予定していましたが、雪のために中止になってしまいました。“忘年会”という日本のネーミングはうまいと思います。今年の不安や困難を忘れようとするパーティーです。それを真似て“忘年会”と名づけながら、「Let's See How Much of 2010 You Remember」という雑学コンテストで私たちの記憶を試す予定でした。忘年会が中止になったのは残念ですが、そのようなコンテストに参加したら私はやはりあんまり覚えていなかったはずです。時の流れの中では、時の点滅する瞬間も「時間」という強力なモノに吸い込まれるようですが、実はそれら全ての瞬間は何処かに残響しているでしょう。その希望を抱きながら来年を迎えましょう。

筆者紹介

ネルソン・グラム

U.S. Attorney (Virginia Bar), Global IP Counselors, LLP 所属。

1981年米国バージニア州生まれ。ジョージ・ワシントン大学 (DC) で国際関係論を学びながら、ウルグアイ大使館でインターン。卒業後、2003年渡日、香川県三野町 (現在三豊市) の国際交流協会で一年勤務。うどんが大好物となる。帰国後、ジョージ・メーソン大学ロースクール卒。2008年8月からGlobal IP Counselors, LLPに弁護士として勤務。趣味は読書、運動。好きな言葉は「鳴かぬ蜚が身を焦がす」。